

日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究 (その3)

— 第三期読本を中心に —

陳 虹彪

はじめに

台湾における日本植民地統治時期（1895-1945）の50年間では「国語＝日本語」教育が実施され、計全5期の台湾人用初等国語教科書が台湾総督府によって編纂されていた。本稿は台湾人用国語教科書と日本人用国定国語教科書（以下国定読本）の比較研究の第三部である。第一部の分析では、第一期国定国語教科書（以下国一読本）が第一期台湾国語教科書（以下台一読本）より遅く刊行されたため、両者に共通する教材を把握し、当時台湾社会や風土と日本の違いとそれが読本の編集に与えた影響を理解することが主な目的であった¹⁾。第二部の分析では台湾の第二期国語教科書（以下台二読本）を中心に、国一読本と第二期国定国語教科書（以下国二読本）との対照・比較を行い、台二読本に約4割の教材が国定読本から取り入れていたことを明らかにした²⁾。

第三部の分析は第三期台湾国語教科書『公学校用国語読本（第一種）』（以下台三読本）を中心に、国一読本、国二読本、そして国三読本と国二読本の修正本（以下国二修読本³⁾）との対照・比較を行い、台三読本における国定読本関連教材について考察を行う。

台三読本と国定読本の比較をテーマとする先行研究については合津の分析がある⁴⁾。合津は台三読本と国三読本、国二修読本の比較分析を中心に分析を行い、台三読本における国定読本出所の教材は四分の一弱にとどまっていると結論付けている。本稿はより正確な結果を得るため、国一読本と国二読本も比較の対象とした。なお、本稿の分析方法については台三読本におけるすべての国定読本関連教材を特定したうえ、教材の出所、類似度と内容の3つの部分に分けて説明を行い、国定読本との関連性を明らかにしていく。

1 台三読本の編纂について

(1) 改訂の理由と教科書題名の変更について

第一次世界大戦後、大正デモクラシーの影響と台湾人による教育機会の増加や開放の要請が増えたため、朝鮮教育令発布後の1919（大正8）年に台湾教育令も公布され、台湾での学制がようやく完備された。これは台二読本『公学校用国民読本』が使われ始めてから僅か数年後のことだったが、さらにその後の1922（大正11）年に新台湾教育令の改正、地方制度の変革など時局の変化に伴い、新国語教科書を改訂する必要が出てきた。台湾総督府は各師範学校と地方官庁に意見を求め、新台湾教育令が公布された直後に台三読本の編さんに着手し、その「内容形式をなるべく国定読本に接近」するようにした。

なお、台湾先住民用の蕃童向け国語読本と区別するため、一般台湾人生徒用の国語読本を「第一種」としたので、『公学校用国語読本（第一種）』となり、蕃童用読本の題名は『公学校用国語読本（第二種）』となった。なお、台一読本と台二読本は「国民読本」と名づけられていたのを、台三読本から内地の国定本と同じように「国語読本」に改めた。それは公学校の国語科が担う国民教育の性格

が消えたことを意味するのではなく、むしろ台湾教育令によって公学校の教科構成が再編され、歴史や地理など今まで欠けていた教科も完備し、各教科が持つ教授目標もより明確となり、各教科を合わせた「国民教育」が成立したのである。また、国語読本の専用教師用教授書もこの時に初めて作られた。

(2) 編纂の様式と教材の変化について

台三読本の様式は前期の教科書と同じように国定読本をモデルにし、全巻の教材は総合的な内容であったが、「児童本位」を強調し、「児童の日常生活に関係深い教材を採用し、文章も説明よりは描寫に重きを置き、また話し方との連絡を考慮し」て会話教材を大幅に増やした。この時期に教授法については特別な主張はなかったが、台二読本では読み方と話し方の間に連絡が乏しかったため、台三読本は「単に読方の材料たるに止まらず」、国語教科の要として多くの場面で取り扱えるようにしたのである。

台三読本は大正12(1923)年から昭和16(1941)年新読本が全巻出揃うまで使用され、植民地台湾で使用期間が最も長かった国語教科書である。周婉窈の研究では、実学と郷土教育の2つの視点から台三読本の分析を行い、台湾で行われていた「実学教育」「郷土教育」と生徒の「(日本への)愛国心」との関連性とその影響などについて論じた⁵⁾。周は、台三読本の教材構成は実学知識や台湾郷土教材がポイントであり、新しい教材が多く採用され、西洋に関する教材(発明品や人物)も取り入れられているなどの特徴を挙げたが、豊富な郷土教材、台湾風の人名及び挿絵に現れる台湾風服装や建物などから、国三読本より「郷土色彩」に富んでいることも指摘していた。

2 教材比較の方法と基準

本稿では台三読本の内容を中心に、教材のテーマや使われる教材内容、構成などによって各期の国定読本から取材したもの及び関連性のあるものを特定する。分析対象は「台三読本」計12冊(第一学年から第六学年用)、「国一読本」計8冊(第一学年から第四学年用)、「国一高等読本」計4冊(第五学年、第六学年相当)、「国二読本」計12冊(第一学年から第六学年用)、「国二修読本」計12冊(第一学年から第六学年用)、「国三読本」計12冊(第一学年から第六学年用)とする⁶⁾。

(1) 教材の出所について

国定関連教材の出所によって、教材を「国二読本関連」、「国三読本関連」、「そのほか」等の3項目に振り分ける。国二読本関連の教材は主に国二読本から取り入れたものだが、教材の採用パターンは「国二読本→台三読本」「国二読本→台二読本→台三読本」などがある。国三読本関連教材は主に国三読本から取り入れたものであり、採用パターンは「国三読本→台三読本」「国二読本→国三読本→台三読本」「国三読本(国二修読本)→台三読本」などがある。そのほかの教材は国二読本と国三読本以外の国定国語教科書から取り入れたものであり、主に国一読本や国二修読本からの教材である。採用パターンは「国一読本→台三読本」「国一読本→台二読本→台三読本」「国二修読本→台三読本」などがある。また、「国二読本→国三読本→台三読本」などのパターンで採用された教材は、「国三読本関連」の項目に振り分ける。

(2) 教材類似度による分類項目の設定

国定読本教材との類似度によってA類、B類、C類、D類、E类等5項目に分類する。台三読本の巻一はタイトルも課の区別もないので、内容によって教材を区切ってページ数で表記し、計37教材に分けて比較作業を行う。教材内容の類似度を低いものから順次にA、B、C、D、Eの5段階に

分け、E類は類似度が最も高いレベルとする。それぞれの分類基準は次のように設定する。

- A：テーマは同じか近似しているが、内容や記述は全く違う。
- B：テーマは同じか近似しているが、一部の内容のみ類似している。
- C：テーマは同じか近似しているが、内容の難易度が違う。
- D：テーマと内容は同じか近似しているが、細部の記述のみ違いがある。
- E：テーマと内容は全く同じか近似している（仮名遣いや漢字などの表記を除く）。

(3) 教材内容による分類項目の設定

特定した教材の内容分類について、時代背景、当時の教育政策及び編纂記録、関連文献を参考し、「児童生活・遊戯と童話教材」、「日本文化・国体・皇室関連教材」、「徳性と公民常識教材」、「生活知識と実学教材」、「軍事・戦争・新領地教材⁷⁾」、「文学と趣味性教材」等六つの項目を設定した。

3 台三読本における国定読本関連教材について

(1) 第三読本各巻における国定読本教材について

各時期の国定読本と対照・比較作業を行い、台三読本における国定読本関連教材を特定し、その結果を表1にまとめた。表1には台三読本各巻の国定読本関連教材数が示されており、全巻にわたって国定読本関連教材が占める割合も示されている⁸⁾。表1によれば、台三読本の各巻には3分の1以上の教材が国定読本の教材と関連性がある。中に巻二、巻五、巻六、巻八を除く各巻の国定読本関連教材数は2分の1を超えている。

また、国定読本関連教材が台三読本の全教材を占める割合は48.66%に達しており、五割弱の台湾読本教材が国定読本に関連していることを示している。

表1 台三読本における国定読本関連教材について

巻数：共通教材数/全教材数					
巻一：21/37	巻三：17/30	巻五：11/27	巻七：17/28	巻九：13/26	巻十一：13/26
巻二：9/28	巻四：15.5/30	巻六：8/27	巻八：10.5/26	巻十：16/26	巻十二：13/26
国定読本関連教材総割合（巻一を除く）				47.67% (143/300)	
国定読本関連教材総割合				48.66% (164/337)	

(2) 台三読本における国定読本関連教材の出所について

国定関連教材は出所によって、「国二読本関連」、「国三読本関連」、「そのほか」等の3項目に分け、その結果を表2にまとめた。表2によれば、台三読本の国定読本関連教材に、53.35%の教材は国三読本から取材したものであり、28.05%の教材は国二読本関連の内容であり、「そのほか」の教材は18.60%を占めている。「そのほか」に分類された教材の出所も表2に明記した。なお、一部の国三読本関連教材は国二修読本にもあったが、国三読本と国二修読本の編修はほぼ同じ時期に行われたこともあり、それぞれの出版時間を確認したうえで教材を振り分けている。

「国二読本関連」の主な教材採用パターンは「国二読本→台二読本→台三読本」だった。内容類似度の分析では全巻にわたって低いレベルのA類とB類教材が大半であった(47教材中32教材)。国定読本をそのまま採用したのは巻三の「とけいのうた」のみであり、一部のみ変更した教材も巻四の「さざえのじまん」などの2~3教材のみであった。類似度が低いのは、国定読本の教材は台湾の教科書に採用される度に台湾の現状に合わせて内容を変更されてきたためだったと考えられる。また、教材の内容構成からみれば、生活知識や実学教育関連のものが最も多く取り入れられている。

表2 台三読本における国定関連教材出所一覧表

出所別	国二読本関連			国三読本関連			そのほか		
	低学年	中学年	高学年	低学年	中学年	高学年	低学年	中学年	高学年
教材数 (計164)	18	15	13	36.5	19	32	9	12.5	9
	46			87.5			30.5		
国定関連教材 に占める割合	28.05%			53.35%			18.60%		
全体(337)に 占める割合	13.65%			25.96%			9.05%		
教材一覧	卷一：2(p.3-4)、6(p.11)、9(p.14)、12(p.17)、22(p.28)、23(p.29)、27(p.34)、29(p.36-37)、36(p.48-49) 卷二：11 ツキ 卷三：1 ハナ、25 私ノウチ、27 とけいのうた 卷四：4 さざえのじまん、5 カシコイ子ドモ、8 私ドモノ庄、16 ナゾ、26 田ウエ 卷五：8 蝶、9 テイシヤバ、16 雷、25 古机 卷六：16 イウビン、23 水のたび 卷七：1 菅原道真、17 阿秀の日記、21 商業問答、22 鳥、24 石炭ト石油 卷八：3 動物の保護色、6 火事、14 塩ト砂糖、22 空気 卷九：4 昔の旅、15 唾の學校、16 温泉、20 汽船・汽車の發明 卷十：7 雨と風、8 森林、11 貨幣、20 物の價、21 平和な庄 卷十一：8 楠公父子、11 日本海 の海戦、19 天氣豫報と暴風警報、25 臺灣の農業 卷十二：11 公事と私事			卷一：1(p.1-2)、4(p.7-8)、14(p.19)、19(p.24-25)、26(p.32-33)、28(p.35)、31(p.39)、32(p.40-41)、34(p.44-45) 卷二：5 ウンドウクワイ、7 オヤウシトコウシ、20 ネズミノチエ、22 ヒカウキ、26・27・28 サルトカニ(一・二・三) 卷三：2 アサオキ、4 オハル、7 タケノコ、8 ユビノ名、9 ヲノノタウフウ、14 ミギトヒダリ、15 四方、24 水デツパウ、28・29・30 ももたらう(一・二・三) 卷四：1 えはがき、14・15 うらしま太郎(一・二)、17 かげゑ、20 くすりとり、22 お話「犬のヨクバリ」、23 木のは、28・29・30 花さかぢぢい(一・二・三) 卷五：3 かぢ屋さん、15 おまつり、19 をろちたいぢ、20 私ドモノ街、21 笑ひ話 卷六：8 熊襲せいばつ、10 にじ、11 汽車のたび、22 炭やき 卷七：3 やくわんと鐵びん、6 石屋さん、8 けんやくと義捐、19 一口話、26 遠足、27 電報 卷八：10 いもほり、12 京城だより、18 塙保己一、25 呉鳳 卷九：3 世界、8 胃の教訓、12 心と心、13 臺北から屏東まで、19 星の話、21 手紙、25 水兵の母 卷十：1 明治神宮、4 新高山、5 アレクサンドル大王と醫師フィリップ、10 分業、14 傳書鳩、16 鯨とり、17 炭坑の話、19 象がり、22 廣瀬中佐 卷十一：1 國旗、2 老社長、5 ゴム、7 ふか、21 平和な庄、22 乃木大將、23 水師營の会見、24 南米より、26 孔子 卷十二：1 明治天皇御製、2 北海道、3 チャールス、ダーウィン、7 銀行、9 臺灣の木材、12 きり、16 電氣の世界			国一読本関連教材 卷三：6 天チヤウセツ、16 センタク 卷七：5 臺灣、10 澳底の御上陸、13 茶、15 夕立 卷八：5 燈台、24 富士山 卷十：13 公慶と奈良の大佛 卷十一：12 税所敦子		
								国二修読本関連教材 卷一：20(p.26)、21(p.27)、25(p.31) 卷二：13 ニンギヤウ 卷三：3 水グルマ 卷四：10 さるのさいばん 卷五：1 天の岩や、11 西瓜 卷六：2 運動会、20 かうもり 卷七：16 牛と熊の戦、25 地引網 卷八：23 小話「二 ニュートン」 卷九：5 西洋の子供、9 樺太便り(兄から弟へ) 卷十：24 鴨緑江の開閉橋 卷十二：4 印刷、14 産業組合、19 諸葛孔明、20 伊勢參宮と大和巡り、26 太平洋	

「国三読本関連」教材の主な採用パターンは「国三読本→台三読本」である。採用された教材の類似度は低いレベルのA類・B類教材が32教材に対し、類似度の高いC類・D類・E類教材が53.5教材である。なお、教材の類似度は上級の学年ほど増しており、国三読本から採用した13個のE類教材の中、10教材が高学年の読本に配置されている。国三読本関連教材には、生活知識と実学関連教材が計28教材、徳性や公民関連教材が計20.5教材、児童・遊戯・童話教材が計20教材、日本文化・皇室関連教材が計8教材、軍事・戦争・新領地関連教材が計8教材、文学教材が計3教材ある。同じ傾向は台二読本の分析結果にもみられる。なお、「四方（台三3（15）」及び「犬のヨクバリ（台三4（22前半）」の2教材は国一読本より早く刊行された台一読本にすでに取り入れられた教材だが、国一読本からも各時期の国定読本に取り入れられた。その後の台湾の国語読本はこれらの教材を台一読本の内容でなく、各時期の国定読本の内容を使用することとなったため、ここでは国三読本関連教材とした。

「そのほか」の教材について、主な採用パターンは「国一読本→台二読本→台三読本」と「国二修読本→台三読本」であった。国一読本関連の教材は全て「テーマのみ同じ」の教材であり、台湾関連の題材が多数を占めている。国二修読本関連の編修パターンは2つに分けられる。一つは教材名が同じだが、内容は台湾独自に創作したものである。例えば「ニンギヤウ（台三2（13）」、「西瓜（台三5（11）」、「鴨緑江の開閉橋（台三10（24）」などがある。

もう一つは、国二修読本の教材をそのまま取り入れる、或いは一部のみ変更して採用することである。「さるのさいばん（台三4（10）」や「天の岩や（台三5（1）」、「樺太便り（兄から弟へ）（台三9（9）」などがそうである。国二修読本は「地方の事情によりよく適合するように工夫して刊行され」、農山漁村などの地方で使用させる方針だったことから、台湾の事情に順応するように編纂されている台三読本も国二修読本の教材を多く取り入れるのではないかと推測したが、実際の関連教材数をみればそうでもなかった⁹⁾。1920年代の新教育思潮は日本本土のみならず、台湾の教育界にも大きな影響をもたらしていた。国二修読本が本土で人気が出たように、台湾でも国二修読本より、新しい思想で編纂された国三読本が影響力を持っていたのであろう。ただ、国二修読本を参考したと思われる20.5教材の中に、類似度が高いD類とE類に属する教材は12教材あったことから、台三読本の編集には国二修読本も重要な役割を果たしていたと考えられる。

(3) 教材の類似度による分析について

前述した類似度の振り分け基準によって、各巻の分類結果を表3にまとめた。A類は計47.5教材、B類は計35教材、C類は計17教材、D類は計45.5教材、E類は計19教材がある。

表3 台三読本における国定関連教材類似度分析結果表

分類	A			B			C			D			E		
	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高
教材数	11	20.5	16	20	7	8	8	6	3	19.5	10	16	4	3	12
合計	47.5			35			17			45.5			19		
割合	28.96%			21.34%			10.37%			27.74%			11.59%		
順位	1			3			5			2			4		

① A類教材

A類教材は主にはタイトルや教材テーマが国定読本と同じだが、述べ方や取材の観点が違うものである。台三読本では特に中学年の読本に多く配置されている。その理由は前述した国一読本関連教材が主に巻7にあることと、この段階に取り入れられている夏休みの生活を記録する「阿秀の日記

(台三7 (17))」や「運動会 (台三6 (2))」、「おまつり (台三5 (15))」のような、台湾の実際状況に合わせて編集する必要のある教材が集中しているからだと考える。

② B類教材

B類教材は国定読本教材の一部のみを残して書き直された教材である。その大半は低学年の巻一に集中しており (20教材に15教材)、中高学年の読本では国二読本出所のものが大半を占めている。その原因は「国二読本→台二読本→台三読本」という採択パターンにあると考えられる。教材の添削回数が多くなると、最初に参考した教材から離れていくからなのである。

③ C類教材

C類教材は国定教材の内容や述べる順番などを崩すことなく、言葉や内容の難易度を調整するために書き直されたものである。台二読本までは国定読本の教材を易しく変更して台湾で使用するのが基本だったが、台三読本から国定読本より高度な内容に編集し直して取り入れる教材がみられた。例えば「サルトカニ (台三2 (16-28))」や「印刷 (台三12 (4))」「産業組合 (台三12 (14))」などがあり、特に国二修読本出所の教材に集中している。

④ D類教材

D類は国定読本教材の一部の段落や構成を変更して台三読本に採用したものである。低学年の読本に集中しているのは巻三の「ももたろう」(3課)や巻四の「うらしま太郎」(2課)と「花さかぢぢい」(3課)が原因である。この影響を除いたら、D類教材は全巻にわたり、比較的に平均的に配置されており、内容も各種類の教材が含まれている。国定読本の教材を台湾の風土に合わせるように添削するとき、台湾の状況を一段落付け加え、内容を少し変更する手法が最も取られていることを示していると考えられる。

⑤ E類教材

E類教材は2つの特徴がある。低学年に配置される教材は主に短い童謡や詞、歌が中心である。中高学年に配置されるものは主に日本精神や戦争関連教材、本土や海外のある地域の紹介など台湾と直接な関係を持たない内容である。

(5) 教材内容による分類結果について

台三読本の国定読本関連教材を内容によって分類した結果を表4と表5にまとめた。表4では各巻における教材内容の構成と教材数、教材の分布が記録されている。表5では各分類項目に振り分けられた教材の割合と教材数の順位がまとめられている。

表4 台三読本における国定読本関連教材内容分類と教材分布一覧表

分類項目	低学年				小計	中学年				小計	高学年				小計	合計
	巻一	巻二	巻三	巻四		巻五	巻六	巻七	巻八		巻九	巻十	巻十一	巻十二		
児童生活・遊戯と童話教材	19	3	5	4	31	3	1	3	1	8	0	0	0	0	0	39
日本文化・国体・皇室関連教材	0	0	1	1	2	2	1	1	1	5	0	3	2	2	7	14
徳性と公民常識教材	1	5	4	5.5	15.5	1	1	3	2	7	1	1	5	2	9	31.5
軍事・戦争・新領地教材	1	1	0	0	2	0	0	0	1	1	2	4	3	0	9	12
生活知識と実学教材	0	0	7	5	12	5	5	9	5.5	24.5	9	8	3	8	28	64.5
文学と趣味性教材	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	2	3

表4をみると、低学年においては初級の児童向け教材が中心だが、徳性と公民常識教材及び簡単な生活知識や実学教材も多く配置されていることがわかる。徳性教材に関しては特に個人の道徳観念に関わる「正直」「勤勉」「親孝行」などの内容が含まれ、生活知識に関しては時計の見方や洗濯、自分の住む町の紹介などの内容が取り入れられている。中学年の読本では生活知識と実学教材が多く取り入れられ始めた。この時期の実学教材はまだ生徒の生活に密接したものが中心であり、台湾特有の生活スタイルを含む生活事物や及び物産の紹介や、学校生活、交通、植動物、商売の基本知識などの内容が多数採択されている。

高学年では生活知識と実学教材の数は依然多い中、軍事・戦争・新領地教材の教材数も増えてきた。この時期の実学教材はより高度な世界地理や理科知識も取り入れられ、台湾の特産を含む様々な産業の詳しい紹介や銀行、貨幣などの商業知識もある。軍事・戦争・新領地教材では樺太便り、南米便りなど新領地の紹介を兼ねる教材が採択されるほか、「伝書鳩」や「広瀬中佐」など軍事戦争関連教材も高学年の読本に集中している。

表5 台三読本における国定関連教材内容構成表

分類項目	台三読本	教材数	各種教材割合	順位
児童生活・遊戯と童話教材		39	23.78%	2
日本文化・国体・皇室関連教材		14	8.54%	4
徳性と公民常識教材		31.5	19.21%	3
軍事・戦争・新領地教材		12	7.32%	5
生活知識と実学教材		64.5	39.33%	1
文学と趣味性教材		3	1.83%	6
各項目合計教材数				164

なお、表5が示した教材内容の構成から言えば、国定読本出所の教材には「生活知識と実学教材」が最も多く、4割弱（計64.5教材）を占めており、その次に多いのは2位の「児童生活・遊戯と童話教材」である。そして、「徳性と公民知識教材」が3位、「日本文化・国体・皇室関連教材」が4位、「軍事・戦争・新領地教材」が5位、「文学と趣味性教材」は6位となっている。台三読本の分析結果と台二読本の分析結果と比較すると、「日本文化・国体・皇室関連教材」は5位から4位へ、「徳性と公民常識教材」は2位から3位へ、「軍事・戦争・新領地教材」は6位から5位へ、「文学と趣味性教材」は4位から6位へと順位に変化が現れた。「軍事・戦争・新領地教材」が増えたのは時局の影響だと考えられるが、「日本文化・国体・皇室関連教材」は台二読本の4教材から台三読本の14教材へと増加したのは、従来台湾特有な道徳観や君主観念を配慮して総督府にて独自に作成されてこの類の教材は国定読本から取り入れるようになったことを示している¹⁰⁾。全体的な教材数が増えたものもあるが、この変化の背景には台湾の国語読本が持つ「国民教育」の中心的役割による影響があると考えられる。台湾の既存観念を温存し続けるのではなく、漸次に「日本化」「内地化」を推進する方法に転換したのであった。この特徴はその後の台四読本と台五読本にも見られる。

おわりに

台三読本は植民地統治時期に刊行された日本語教科書の中に最も使用期間が長く、学制や教科目の変革によって教材内容にも大きな変化を見せたものである。本稿の分析によれば、台三読本における国定読本関連教材は全教材の48.66%を占めしており、5割弱の台湾読本教材が国定読本の影響を受けていると言える。さらに、これらの教材を出所、出所教材との類似度及び教材内容の構成など3つ

の視点から考察を行い、次の結論を得ることができた。

教材の出所に関し、台三読本の教材は新たに創作したもの以外、主に台二読本、国三読本、国二修読本を中心に適当な教材を採択していたが、その中に国二読本、国一読本及び台一読本由来の教材も多数あった。同時期に使われている国定読本から取り入れた教材の場合は出所教材との類似度が比較的に高いが、旧国定読本から取材したものなら、添削される回数が増えるので、類似度も低くなっていた。

教材の類似度分析について、低学年では類似度の低い教材が多いが、中高学年の読本では類似度の高い教材も増加する。なお、低類似度の教材は初級教材以外、台湾でも存在する風土や生活スタイル、物産、常識などの教材にも集中している。高類似度の教材は台湾の風土に直接関連しない物や事、例えば日本文化、皇室関連の内容、日本本土や海外の特定地域の紹介などのものが多かった。

教材内容の構成に関しては、台二読本と同じように実学関連教材が最も多いが、時局の変化と台湾での植民地統治政策の影響で「軍事・戦争・新領地教材」が増え、国定読本からの取り入れる「日本文化・国体・皇室関連教材」の数も増加傾向にあった。

今後はこれまでの分析結果を踏まえ、国定読本が植民地台湾における全五期の国語教科書に与えた影響及びその全体像を明らかにする。

注

- 1) 「日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究（その1）— 第一期読本を中心に —」（平安女学院大学研究年報第12号（2012.6）、pp.15-23）
- 2) 「日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究（その2）— 第二期読本を中心に —」（平安女学院大学研究年報第13号（2013.6）、pp.1-9）
- 3) 海後宗臣編纂、「所収教科書解題」、『日本教科書大系近代篇第7巻国語（四）』所収、講談社、pp.718-723。本文献によれば、国三読本の刊行と同時に、国二読本を修正した修正本も使用されており、いわゆる「黒表紙本」である。当時の教育思潮により、国三読本は「文化的事情から都市の児童に適するように作り」、修正本は「地方の事情によりよく適合するように工夫して刊行され」、農山漁村などの地方で使用させる方針だという。ただ、現実として当時最も多く採択されたのは国三読本であり、国二修読本を採択したのは全国府県の三分の一にも及ばなかったという。
- 4) 合津美穂、「第三期台湾読本にみる「内地化」と「台湾化」— 第三期国定読本との比較を通じて」、科研報告書『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究 — 国定本との異同の観点を中心に —』（課題番号18330171、pp.55-69）
- 5) 周婉窈、「實學教育、郷土愛と国家認同 — 日治時期台湾公学校第三期『国語』教科書の分析」、『台湾史研究』4巻2期（1997）、pp.7-56。
- 6) 研究対象とする教科書は『日治時期台湾公学校と国民学校国語読本』復刻版（台北：南天書局、2003）、『日本教科書大系 近代編第6巻』、『日本教科書大系 近代編第7巻』を参照。国定第一期の尋常小学読本の一部及び国二修読本は現物を使用した。
- 7) 台一読本と台二読本中心の分析では「軍事・戦争教材」として分類項目を設定しているが、台三読本から時代背景と教材の変化を考慮し、「軍事・戦争・新領地教材」に変更した。
- 8) 教材を事例として挙げる時には「期数巻数（課数）」で略記する。例えば台三読本巻四22課は「台三4（22）」と略記する。また、台三4（22）の「お話二つ」の「犬のヨクバリ」と台三8（23）「小話」の「二ニュートン」をそれぞれ0.5教材とカウントする。
- 9) 同上3、pp.718-723。

- ¹⁰⁾ 台二読本のデータは巻一と巻二のデータを除いて計算した結果だったため、教材数での比較はできないが、「日本文化・国体・皇室関連教材」に関しては第三読本の巻一と巻二になかったため、教材数から教材の増減を検証することができる。

【謝辞】 本研究は JSPS 科研費 23730775 の助成を受けたものである。

A Comparative Study of the Third Series of Japanese Language Textbooks Used in Taiwan and the National Textbooks Used in Japan during the Colonial Period

CHEN, Hung Wen

This paper attempts to explore how many Japanese teaching materials used in colonial Taiwan were taken from the national Japanese language textbooks adopted in Japan during 1923-1941.

Through a variety of analyses, I intend to show that even if 48.66% of the teaching materials in Taiwan were related to or were copied from the national textbooks, most of them were taken from the third series and the reduction of the second series Japanese language textbooks. I would also like to prove that they included some from the first series and the second series.

Most of the teaching materials was rewritten so that they would be suitable for lower level classes. Some stories in the materials were replaced by totally different stories, while almost all of the textbooks for third to sixth graders were used without significant changes. Most of them were stories about the Imperial Family of Japan, Japanese culture or an introduction to foreign countries which did not have any direct relationships with Taiwan in those days.

Just like the Second Series of Japanese language textbooks in Taiwan, the contents were mostly related to the teaching of science and practical skills. Under the influence of the political changes, the increasing number of military and new territory teaching materials tended to be used. Another noticeable point is that the use of materials dealing with Japanese culture and the Imperial Family of Japan were also on the increase.